

## 書 評

## 「言語の習得」E. Oksaar 著 在 間 進 訳

(大修館書店)

原書の標題 *Spracherwerb in Vorschulalter : Einführung in die Pädolinguistik* が示す如く、言語習得研究の対象を、話し言葉が唯一の言語手段である就学前の子どもに限定し、幼児言語学 (Pädolinguistik) 的立場からのアプローチを試みている。

本書の構成は4つの章より成り、第1章で、幼児言語学の課題と発展、第2章で、幼児言語学の理論的および方法論的基盤、第3章で言語習得の前提と条件、第4章で、言語発達の諸段階を扱っている。全体的にバランスのとれた、理路整然とした論旨の展開、具体的研究成果の紹介、およびそれらの緻密な比較検討と分析、さらに著者自身のデータ (スウェーデン語、ドイツ語、エストニア語) に基づく総合的判断が論じられている。また、ある事項に関して本書内の関連参照箇所が、その都度丁寧に指摘されている点で、入門書性格も兼持している。言語習得研究の体系的整理、現在の論争点、未解決の問題点など、著者独自の卓越した見解が述べられているので、言語発達研究に携わる者に、方向付けを与える必読の書であるといえよう。尚、どの章をとり出して読んでも、それなりに独立的性格を持っている。

第1章では、次のように幼児の言語発達研究を位置づけている。幼児言語学の分析の中心はコミュニケーション行為であり、伝達的言語能力の成立と発達の研究を主要課題にするものである。個人における言語習得、言語発達を把握する為には、心理学、社会学、というある一側面から扱ったのでは、全体的把握が不可能であり、文化人類学、医学、生物学、言語学などの様々な側面から問題点を照らし出し、技術、理論、方法論を駆使して、研究目的に適合した研究様式を取らざるを得ない事を指摘している。そして、それらを結合した学際的 (interdisciplinary) な学問が幼児言語学であるとしている。

随所で著者が触れているが、幼児の言語学習は身近なものであり、一見自明と思われる日常的なものから、全く新しい事実を見つけ出す方向である。そして、自然場面の逸話的記録とテスト場面の結果は、相補的機能を果たすものであり、ある側面については、自然な言語環境においてなされた観察によるデータに、重視されるべきものがある、と言う。しかし、データ収集における方法論上の多様性のため、自然場面の観察結果から、科学的知識としての比較や一般化が困難であり、方法論的結

論をうまくひき出せない事が、言語習得研究の弱点であろう。この点について、他のデータと比較可能となるような方法論上の改善が必要と思われる。言い換えれば、質の良い信頼できるデータが多くあることも、言語発達研究に欠かせない事と言えよう。少ない調査事例に基づいた一般的傾向で、その言語全体を代表させたり、普遍性を論ずる危険性への指摘も行っている。

周知のように、言語発達研究は、各時代に支配的な言語学的、心理学的、哲学的発展に影響され方向づけられてきている。1960年代の統語論、形態論中心の立場からは、言語発達の普遍性を目指した方法が多く、これでは個人差の原因と分析記述が説明できない事を指摘している。そして、これを補う方向としては、今日の機能的、伝達的、認識論的研究側面への関心の拡大が示すように、意味論的研究、実用論的研究への移行である、とする。特に注目されるのは、言語的、非言語的分析をも含めた組織的、統合的分析傾向である。

次に、軸文法、変形生成文法、生成意味論、格文法など、各種言語理論モデルの有効性を論じ、それらのモデルが、成人言語中心、文中心であるが故に、それを基準として子どもの初期言語発達の記述を行うのは不適當である、と批判した。つまり、子どもの言語が成人の言語に到達するまでの不完全なものと考えてのではなく、言語発達の各段階における、自立的言語体系を仮定すべきだと考え、その点で、意味論中心モデル、機能的アプローチを評価している。この考え方は、今や主流と言えるが、一方、コミュニケーションという観点からなると、人間のコミュニケーションは、言語形式によるだけでなく、非言語的な身体運動によっても行われ、身振りはそれだけでコミュニケーションの荷い手となりうるが、多くの場合、言語的なものと共に現われ、ひとつの機能的単位を形成する事に触れている。既に、産声に代表される原初期に、Dyade (母子の特別ペア) から、様々なコミュニケーション機能を観察できる (4章) 例を示している。幼児の伝達行動を直接観察する際も、その文脈全体、特に従来見落とされていたパラ言語的 (イントネーション、速さ、リズムなど声の質や話し方)、動作学的 (表情、眼の動き、身体運動、距離) 側面と、言語内容との関連を考慮に入れた、コミュニケーション行為を基礎におく現象分析の必要性を強調する。

言語発達を測定する指標として、アメリカにおける比較的最近の研究の大部分が用いている MLU (Mean Length of Utterances) が、どの言語にも有効とは限らない事を、著者は、エストニア語、ドイツ語など屈折語尾の豊富な言語 (エストニア語には14の格がある) 事例を引用して指摘している。確かに MLU は、他の発達テストとの相関も高く、個人差の大きい初期発達段階では、暦年齢より有効性の高いことは定説であり、日本語においても MLU を指標にした研究が近年みられる。が、次の点を考慮に入れておかないと、分析を誤る可能性がある。つまり、言語発達研究の主流が何といても英米語圏に集中している為、たとえば日本語を例にあげても、近隣地域を飛び越えて、欧米研究結果との単純な比較から、日本語の特異性へと論旨を展開しがちな事である。

さて、本書で最も多くの頁を費している第3章では、言語習得の前提となる要因を言及するとともに、言語発達研究上未解決の問題を、特に取り上げ論じている。

その第1は、コミュニケーション行為における非言語的要素に関し、(1)大人同士の場合と、大人と幼児の場合とで非言語的行動が異なるか。(2)大人の身振りや、発語に伴う動作 (指差し、玩具提示、動き) は、幼児にどう理解されているか、このような行為は、どのような反応をひき起こすか、の2点を取りあげている。

第2に、子ども自身は言語について何を知っているか、つまり、子ども自身の言語意識、メタ言語的能力研究の必要性を述べている。そして、事例研究の比較検討より、次の点を指摘している。(1)音韻的分析能力は3歳児で既にある。(2)5歳以下の子どもは、語の選択にあらわれる意味的不整合に特に反応する。(3)2:6で既に、ある種の言語実用論的規則に対する感覚も生じる。(4)複数言語で育つ子どもは、2~3歳で既に異言語の存在に関する意識が観察できる。これらは、実験的にも自然場面観察からも、今後の発展が期待できるテーマであろう。

また、言語機能、伝達能力、相互作用能力の分析より「子どもが何を学習するのか」を論じた。そして、経験主義、生物主義批判から「言語はどのようにして習得されるのか」を論じた。さらに、第2言語である外国語学習の例や、野生児 (言語的コミュニケーションを必要としない環境で育ったため言語的遅滞が著しい) の例をあげ、これらが環境の欠陥を取り除くと正常に言葉を発したことから、「言語はいつ習得されるのか」を論じ、臨界期の問題にせまっている。

4章でも、言語発達の諸段階について興味深い見解が述べられている。ここでは、特に研究者間で論点の異なる事項をとりあげよう。

まず、「喃語と有意味語との連続性の有無」について、いくつかの中心的研究が手際良く整理されている。著者の見解によれば、喃語期出現音声は、音韻発達に影響を及ぼさないとする形式的立場 (非連続) に立つか、あるいは喃語期に頻出の音声連鎖が、初語音声にも好んで使われるという機能的立場 (連続) に立つか、という出発点の相違にすぎない、と考える。

次に「言語成立期と、それを決定する為の規準」について論じている。(1)伝達の側面を重視する立場では、誕生と共に言語が成立すると考える。(2)統語論重視の立場では、2語文発生と共に言語が成立すると考える。(3) Lenneberg は一定の身体的成熟および成長を前提とする為、2歳以降と考える。(4)著者は、一定の音声は一定の意味と固定的に結びついた時点を言語成立期とする Bühler の見解を支持する。尚、喃語期と一語発話期の間に過渡的段階を想定し、その段階での発声レパートリーは喃語と音語 (一定の指示機能と固定的に結びついた一定の音連鎖) であると言う。

また、一語で意味と結びつく発話、つまり、その発話が単に表象それ自体を示すのではなく、機能的には文等価な発話は、一語文と通常いわれているが、「その可否」について理論的問題を論述している。著者は、「一語文の意味を文によりパラフレーズできるということは、必ずしもそれだけで文と断定すべきではない」と考える。

一方単語は殆ど常に、意味と共に学ばれる。その際、コンテキストからどの要素をどんな規準で選択するかは、意味的、語彙的発達に関する興味深い問題といえる。著者によれば、意味要素の習得過程は、意味の拡大と限定という2つの対立した力が、周囲の人間の反応に影響されながら働くとする。

尚、単語の意味習得に関し、知覚的類似性を依り所にしているクラークの SFH が不十分である事を指摘し、機能的同一性、色や形の一様性、近似性などの意味的特徴に基づく、との見解を述べている。

さらに、子どもが未知の事物を言語的に表現する時、その発話は、コミュニケーション全体を見ることでのみ判断可能である事を、具体例により示唆している。

本書では一貫して、統合的アプローチが子どもの言語行動の分析と解釈にとって、いかに重要であるかを述べている。そしてその発展性は、関連各分野の研究成果の相互活用度に依存していると言える。一方、4章で示された如く、立場の違いから、同一の現象について見解の不一致がみられるケースも多い。この混乱の糸がひとつひとつ解きはぐされていく所に本書の醍醐味がある。

(お茶の水女子大学助手 秦野悦子)